

江戸時代の学校の復興を 明治期の漢学者らが実現 漢学の伝統と功績に迫る

大阪の商人が開いた
名門「懐徳堂」

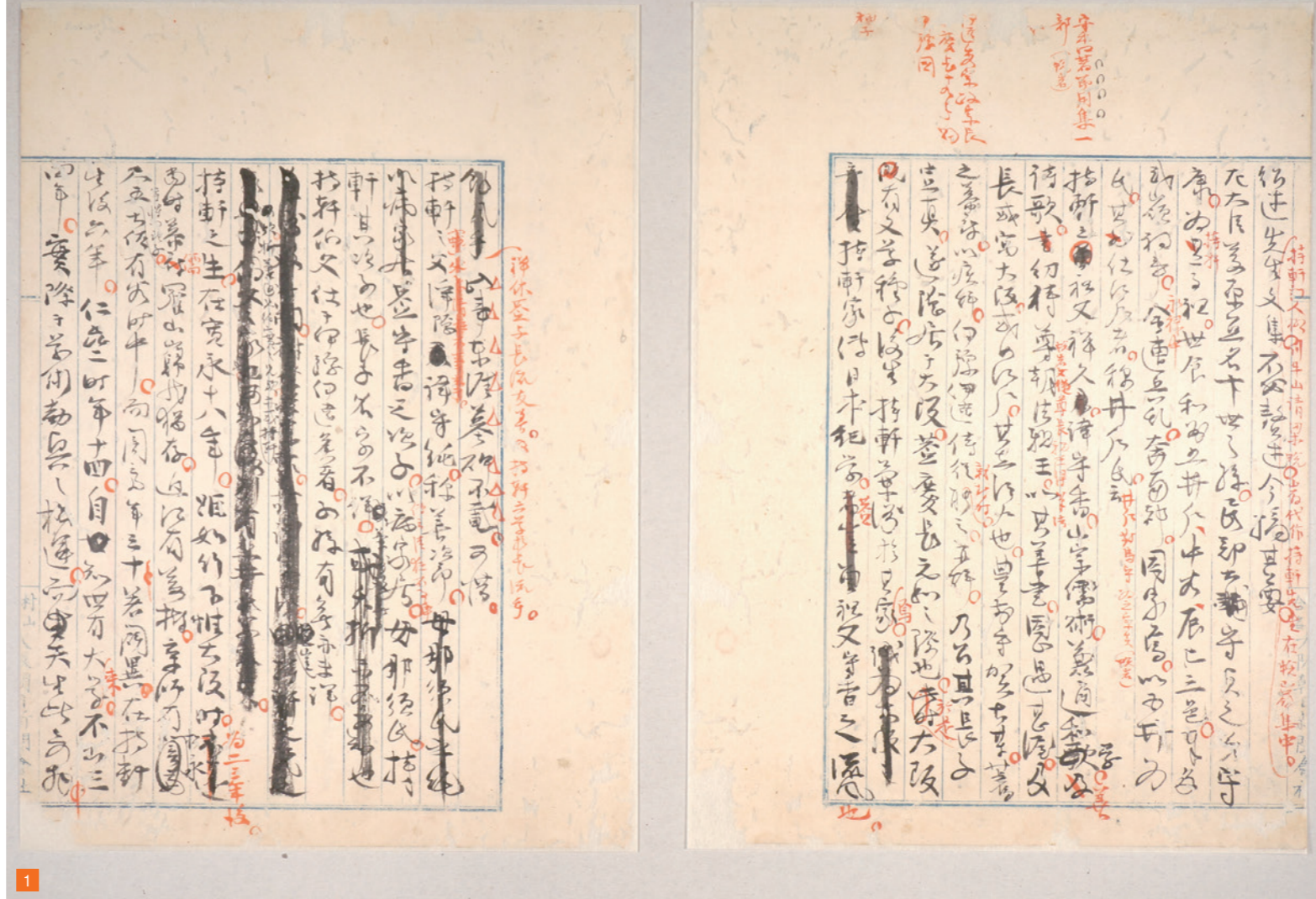
江戸時代の大坂の学校と言え
ば、医師、蘭学者として著名な緒
方洪庵の開いた適塾がよく知られ
ています。この適塾と共に現在の
大阪大学の精神的源流とされてい
るのが、大阪の有力商人が出資し
て開いた懐徳堂です。「大阪には数
多くの蔵屋敷があり、当時の知識
階級である武士らと付き合うた
めには学問が重要だ、と商人たち
は考えたと言われています」と竹
田教授。懐徳堂は儒学者・三宅石
庵を学主に迎え、朱子学を基本と
しつつも諸学の長所を柔軟に取り
入れた学問を展開、自由で批判精
神に満ちた学風は全国に名を馳

江戸時代の「学校」には、寺子屋や藩校、私塾などがありますが、大阪には商人らが設立した懐徳堂というユニークな学校がありました。明治維新の到来と共に140年の歴史を閉じましたが、約40年後、一人の漢学者が復興を試みます。国語科教育専攻の竹田健二教授は、この顕彰運動の研究に注力しています。



PROFILE
教育学部 国語科教育専攻
竹田 健二 教授
たけだ けんじ

島根大学教育学部を卒業後に大阪大学大学院文学研究科に進み、初めて西村天因の存在を知りました。学生時代に、難解な漢文をめぐって夜中まで仲間と議論し合ったのは良い思い出です。思索を巡らす中で何かが見えた瞬間が楽しいですね。



1



3



4

1. 種子島で見つかった西村天因の所蔵資料の一部。「懐徳堂考」のもとになった草稿。2. 種子島開発総合センター「鉄砲館」で資料調査を行う竹田教授。3. 大礼服姿の西村天因。4. 懐徳堂研究の最新成果をまとめた編著『懐徳堂研究 第二集』。

天因は1910年、懐徳堂に関する連載記事を20回にわたって朝日新聞に掲載。機運が高まる中で懐徳堂記念会を発足させ、その翌年に懐徳堂記念祭を挙行。1916年には懐徳堂の再建も実現しました。しかし1945年の大阪大空襲で校舎が焼失し、焼けずに残った蔵書は大阪大学に移管されました。

顕彰運動を経て再興
新資料をもとに解明狙う

しかし幕末維新の動乱により1869年、懐徳堂は140年の歴史に終止符を打ちます。それから約40年後の明治後期、大阪学術の発展と商道德の育成に大きく貢献した知の拠点に再び光を当てたのが、漢学者で、大阪朝日新聞(当時の主筆でもあった西村天因)でした。「元々は、懐徳堂学主の子孫に復興を頼まれたのがきっかけのようです。天因は、大阪の政界、財界を巻き込んで、大阪の誇るべき文教の歴史として、懐徳堂を顕彰する運動に注力します」。

天因は1924年に逝去、その蔵書はすべて記念会に入り、今は大阪大学にあるとされていましたが、2017年、天因の子孫が大阪大学を訪れたことを機に、種子島にある天因の実家に資料が保管されていることが分かりました。

「私はすぐに種子島に飛んだのですが、想像以上の膨大な分量で興奮しました」と竹田教授。「新聞の連載記事『懐徳堂考』の元になる資料や草稿もあり、天因が文献資料に基づいて研究を進めていたことが分かったのです」。資料の保存状態も良くなかったため、「部虫食いなどで判読できない部分も」「大まかには確認しましたが、崩し字にも手を焼いており、解明にはもう少し時間がかかりそうです」と苦笑します。

天因の研究を続ける中で、竹田教授が改めて感じたのが漢字の力です。「夏目漱石や森鷗外が漢詩を作っていたのは有名ですが、明治大正期の知識人らにとって漢学はいわば常識であり、文化の基礎になっています。私たちは今も漢字を使っています。漢字とつながっている漢文や漢学の世界への理解をもっと深めてもらえればと思います」。